

## 相沢治雄氏（連盟顧問、連盟創立者）逝去

北海道エスペラント連盟現顧問で、1932年の第1回北海道エスペラント大会での連盟創立に参画して以来、つねにエスペラント運動の第一線で指導的役割を果たしてきた北海道エスペラント界の重鎮、相沢治雄氏は本年9月9日午前0時24分、札幌市で心不全のため急逝した。享年76歳。相沢氏は一昨年12月から糖尿病疾患のため市内の病院で療養中だったが、さきの日本大会に参加するほどの快復ぶりを示した矢先だった。

相沢治雄（あいざわ・はるお）氏は1911年、北海道・旭川に生れ、1928年にエスペラントを独習、1931年札幌E会入会、1932年の第1回北海道E大会（連盟創立大会）出席した最古参の会員であり、北海道のE運動への貢献は計り知れない。

戦前から現在にいたるまで札幌E会、北海道連盟の中心メンバーとして、1936年の第24回日本大

会（札幌）準備委員長、戦後は連盟書記長・事務局長を歴任、1985年以降連盟顧問。

『北海道エスペラント運動史』全二巻、85～86年、の編集に労苦を費やし、今年8月新版発行の“Ainaj Jukaroj”共訳者としても情熱を捧げた。

相沢氏は病床でも凛として「エスペラントは不滅」と語りながら、永遠の眠りにつかれた。

## 弔 歌

木村喜壬治

うつし世の業なし終えて弥陀のもとへ神去りましし治雄が幸はも  
むそとし 六十年をエスペラントの拡がりに尽くしたまへる貴兄が功績

言葉の壁こぼたむと現世うつしよのかざりをエス語に捧げたる貴兄

をちこちのエス語の芽生えをまつぶさに集めし貴兄は歴史なりけり

七十五回日本大会にやすらげく侍りし貴兄は支えられつつ

ゆり籠のエスペラントをうつしよのかざり育てし貴兄につづかん

（この弔歌は9月10日、札幌市大谷会館での相沢氏告別式の霊前で詠みあげられた）

札幌 児玉 広夫

最近、お見舞にお伺いする毎に、お元気になられたご様子で喜んでおりましたのに、特に5日前（9月5日）に伺がったときは、娘さんの撮られた第75回日本大会の写真を手にしながら、大変懐しげに古い同志との再会や、大会の成功を満足げに語ってくれたことなどを思うと、今更のように“世の無情と運命の儚さ”を感じずにはいられません。

かえりみて、私と相沢さんのお付き合いはエスペラントを通して40年という長い期間でした。

今でも私の脳裏にはっきりと刻まれておりますのは、昭和24年、田舎から札幌に来て間もなく当時の北大生、今村 元君と相沢さん宅を訪れ、その頃はまだ34〜5歳の若さだったでしょうか流暢に話されるエスペラントにすっかり魅了されたこと、特にあのハムレットの有名な一節、“*Ĉu esti aŭ ne esti...*”の部分を、日本語訳はもちろん、英語、独語など空んじて詠まれたときは、20歳そこそこの若い者の知識欲をいやが上にもかきたててくれました。また、未だ食糧難の折、確か5〜6人の小さなお子さんがおられましたがお子さんご手製の夕食をご馳走になったことが懐かしく思い出されます。

今一つ、私にとって忘れることの出来ないのは独身寮の侘び住まいの身で、当時唯一、心を和ませてくれるものはラジオ音楽、しかし、なかなかそれを手にすることが出来ない。そうした時、相沢さんは 何とレコードの入る美しい色模様のケースに、電池式と差込み式併用のラジオを作ってくれたのです。これは、私にとって何物にも代え難い *trezoro* として、いつも心の中に大事に秘蔵しております。

相沢さん！ あなたは定山溪鉄道を定年退職さ

れた後の自由時間を「アイヌ・ユーカラ」のエスペラント訳に情熱を捧げられました。詩の形式を *jambo* にすべきか、*trokeo* にすべきかなど試行に試行を重ねて遂に訳し終えることが出来た時のあの生き生きした姿が思い出されます。また、常におっしゃっておられたことは、今誰かが北海道エスペラント運動史を手掛けなければ永久に日の目を見ないだろう。運動の軌跡を辿ってこそ将来展望が開けるのだ、という強い信念が遂には自らを編集へと駆り立て、それを立派にやり遂げました。そのために、齢70に届かんとするとき、ワープロを習い始め、薄暗い電灯のもとで、コツコツとワープロを打続け、ついに小運動史上・下巻を完成させました。しかし、そうしたお仕事の無理が知らず知らずのうちに体を蝕む結果になったのでしょうか。本当に、時折、お仕事の様子を拝見して、あの細いお体のどこにそれを為し遂げるエネルギーが潜んでいるのだろうかと考えさせられました。そうです。相沢さんを支えたエネルギーとはやはりエスペラントだったのです。エスペラントのために生き、そして一生を終えられたのだと私には思われてなりません。

ああ、相沢さん！ 最後まで愛し続けたエスペラントでお別れの言葉を申し上げます。

“*Dormu pace, ripozu kviete,  
Vivu dolĉe kun via amata edzino  
en la feliĉa mondo! Adiaŭ, adiaŭ.*”

去る9月10日、札幌市・大谷会館で挙行された告别式で、札幌エスペラント会を代表して述べた弔辞です。そのときは、原稿抜きで話したのですが、編集者からの依頼で筆記したものです。

## HEL創設の立役者逝く

札幌 木村喜壬治

エス語への執念われにうつれかし

茶毘せる貴兄<sup>きみ</sup>が骨をひろいつ

骨あげのとき、歳を忘れてこんなことを思っていた。

彼とは、1933年出札以来の交わりである。当時、彼の宅で札幌エス会の週例会がもたれていた。集まる者4~5人(在籍10数名)。同じ頃、札幌エス会(鉄道省)には20余名(半数は女性)。小坂狷二氏の関係から道内には鉄道関係者が多かった。彼がエス語を始めたのは、15~16歳のときと聴いていたから、1928、29年頃と思われる。大正末期の札幌エス会会員名簿には250名位が登録(うち北海道大学の教職員が30~40名)されていた。その頃、「エス語を知らざる者は文化人に非ず」(当時の札幌エス会会長・高瀬正栄談)の風潮があった、という。

丁度その頃、プロ・エス運動が組織化され、エス語界の大きい勢力となったため、当局の注目するところとなった。そのために、官公吏の職であった人々は次々にエス語から離れていったが、当局の注目はエス語を否定するものではなかった。

こうした下り坂の時節ではあったが、道内には孤立して勉強していた人が点在していたので、彼はEPA(大本エスペラント普及会)の中村久雄

氏と連絡を密にし、主軸となって1932年に山部村(EPA北海道支部所在地)での第1回北海道大会にこぎつけた。この大会においてHEL(北海道エスペラント連盟)が誕生し、札幌、函館、小樽、旭川、帯広、室蘭、苫小牧のエス会、EPA支部、孤立の個人を含め、ささやかな組織活動が開始された。

HEL発足以来56年が経過し、その間、道大会は52回を数える。各市持回りで大会は開催されても、活動の中心はいつも札幌にあったので、発足以来の、戦時中の灯を消さないための捨身活躍を含めて、30年間は彼の努力に負うことの多いのを今更のように痛感する。

彼は会長職を望むことなく事務局長の役割を遺憾なく果たしてきた。70歳にしてワープロを習得し『北海道エスペラント運動史』を編集したことは、彼がこれまで先頭に立って活動してきた経験と努力の集積以外の何物でもない。

彼が今年の52回道大会まで、世界大会渡航と去年の病欠を除いて欠かさず出席していることは、他の誰も追従しなかった、否、できなかった彼の情熱を端的に示すもので、彼が編集した2冊のエス運動小史とともに未長く語り草として残るであろうことを確信する。



(第14回北海道E大会、1950年、小樽。前列中央が相沢氏)

## 故相沢治雄氏の略歴

- 1911年 12月 3日 北海道旭川に生れる
- 1920~21年 火星大接近のこともあり、火星に地球人の存在を知らせるためEを使ったらどうか、ということをもとに見てEに関心をもつ
- 1928年 大阪発行のラ・タギージョでE独習
- 1930年 札幌市立商工学校電気科卒業
- 1931年 札幌市電気局（現交通局）に入局、札幌E会に入会
- 1932年 第1回北海道E大会出席、爾来1974年第59回 Hamburgo 世界大会出席のため一回欠席しただけで全大会出席した
- 1934年 北海道E連盟の常任幹事となる
- 1936年 第24回日本E大会準備委員長となり大会を主宰する
- 1939年 一身上の都合で電気局を退職、定山溪鉄道株式会社に運転士として入社。以後、1969年に同社を定年退職するまで、技手助役、藤ノ沢駅長、運転課輸送係長、観光課事業係長、豊平駅長、開発企画室第一課長補佐等の要職を歴任
- 1954~62年 北海道E連盟の書記長・事務局長
- 1965年 第50回UK東京大会に参加する
- 1969年 定山溪鉄道株式会社を定年で退職
- 1973~75年 『アイヌ神謡集』翻訳グループの一員として LEONTODO に訳業を発表。のちに、“Ainaj Jukaroj” に結実
- 1974年 第59回UK Hamburgo 大会に参加する
- 1979年 “Ainaj Jukaroj” 刊行される
- 1984年 『北海道E運動史』第1部完成
- 1985年 第49回北海道E大会で連盟顧問に推薦
- 1986年 『北海道E運動史』第2部完成、第50回北海道E大会で特別功労表彰される
- 1988年 “Jukaroj” 再版。9月9日札幌で急逝。

## 相沢氏を送る

故相沢治雄氏は一昨年12月、札幌エス会のザメンホフ祭直前に肺炎のため国立西札幌病院に入院、その後糖尿病疾患との診断で市内西区の西村病院に転院、治療を続けていた。

日本大会を前にした7月31日に、大会準備のため札幌に来ていた苫小牧の星田淳氏らが相沢氏を見舞った記事が本誌前号に報じられたばかりである。そのときは、視力の不自由は言うものの、語り口は以前と変わらぬ、病気を感ぜさせぬものだったという。帰り際には、病室を出て階段のところまで見送りに来た。万歩計をつけて院内を歩くことを自らに課し、病気の克服をはかれていた。亡くなる6時間前、9月8日の夕食後にも、院内を歩くいつもと変わらぬ相沢氏の姿があった、と通夜の席で葬儀委員長が語っていた。

相沢氏は8月20日、21日の第75回日本大会に息女に伴われて参加した。それが Esperantujoでの相沢氏の最後の勇姿となった。

相沢氏の告別式は9月10日、札幌市中央区の大谷会館斎場でしめやかに執行なわれた。生前の氏の業績にふさわしく、私鉄、エスペラント界からの会葬者、供花、弔電も多数寄せられた。

連盟の木村喜壬治、高橋要一顧問、吉原正八郎、児玉広夫副会長、宮岸忠孝事務局長はじめ苫小牧の星田淳氏ほか札幌エス会の会員多数が列席して相沢氏にお別れした。児玉氏が弔辞を述べ、木村氏が弔歌を詠みあげた（以上別掲）ほか、僧侶、葬儀委員長が相沢氏のエスペラント運動での足跡について、繰り返し紹介していたのがエス界からの参列者の胸をこみあげさせた。

にわかには降り出した雨の中、samideanojに見送られて、s-ro相沢治雄は出棺していった。

---

左の略歴は相沢氏編『北海道E運動史』第2部の自筆経歴等から作製した。 編集部

## Ainaj Jukaroj のアイヌ語文法解説のことなど

札幌 切替 英雄

自分が書いたものについて、さらに何か書くことは潔いと思いませんが、敬愛する児玉広夫さんのお勧めにより、Ainaj Jukaroj (HOŠIDA Acuŝi 編、HEL出版、札幌、1988年)の付録として私が寄稿したものについて述べまして、あつかましいお目汚しといたします。

私の寄稿は“Gramatika skizo kaj vortareto por legi unu rakontoversaĵon el ‘Ainaj Jukaroj’”で、本書の112ページから144ページに載っています。『アイヌ神謡集』(知里幸恵、郷土出版社、東京、1923年。現在、岩波文庫で購入可能)の中の第10回話(本書74、75ページにエスペラント訳あり)のアイヌ語とそのエスペラント訳(74、75ページのエスペラント訳とは別)、およびアイヌ語文法解説、アイヌ語小辞典から成ります。文法解説と少辞典は、このアイヌ語の本文に現われる文法事項と単語の意味を説明したものです。これによってアイヌ語原文とエスペラント訳を対照して読むことができます。また、もし敢えてエスペラント訳を見ないでアイヌ語本文に直接チャレンジされる方がいらしても、解説は十分に可能と思います。そうなるように工夫したつもりです。ただし直接的解説を行なうためには、アイヌ語に対する多大の興味と多少の忍耐力が必要です。

エスペラントの訳文はアイヌ語の仕組みをできる限り反映するように、しかしエスペラントの仕組みをこわさぬように作りました。もし昔のアイヌにエスペランチストがいたら、こんなふうに訳したろうと思います。

この訳文を作りながら、エスペラントの言葉としての柔軟性に改めて驚きました。このことに関して、一言いたします。

私たち日本人がエスペラントの新しい文体を作る余地はものすごく広いのです。私たちはもっと自由にエスペラントを使うことができます。エスペラントにはそれに耐えるだけの柔軟性があるの

です。もちろん自由な運用には誤りがかならずついてきます。しかし、その誤りからこそ新しいスタイルが生まれるのです。

ある古くからのエスペランチストがなかなかエスペラントをお書きにならないので、「どうして書かないのですか」と尋ねましたら、「うるさい人がいるからね」とのことでした。添削とかkontrolaとかよばれる作業は、時に新しい芽を摘み取ってしまう危険な仕事です。新しい芽を摘み取られた苦い思いがエスペラント文を書く妨げになっているという方はぜひいぶんいらっしやると思います。

また、かつてある方が私の書いたエスペラントを日本人のエスペラントと評したそうです。しかし日本人のエスペラントとフランス人のエスペラントが同じであれば、これほどつまらないことはないと思います。いろいろな民族がいろいろなスタイルのエスペラントを書いてはじめてエスペラントは豊かになるのです。

私はヘロルドには日本文が多すぎると思います。第一、北海道にエスペラントで投稿できる雑誌はMateno en Sapporoを除いて、これしかないのです。もったいないことです。私たちの共通財産であるヘロルドを誤りで満たすではありませんか。新しいエスペラントを作って行く元気を持つてはありますか。

児玉広夫さんの御依頼は、エスペラントに慣れていない方々が、一度でもAinaj Jukarojのページを繰る気持ちになるように紹介記事を書けとのことでしたが、かつてなことを書いてしまいました。なお、御依頼の主旨に沿って、本稿は日本語で書きました。

最後になりましたが、『アイヌ神謡集』とAinaj Jukarojはすばらしい本です。ぜひ、目次 Enhavo と知里幸恵 ĈIRI Jukie の序文 Antaŭparolo にだけでも目を通していただけたらと存じます。

1988年9月

HEL大会参加者各位

大会終了御挨拶

HEL第52回大会は第75回日本エスペラント大会に併せて開催しましたので、時間の制約があり十分な協議を行なうことが出来ませんでした。このことは予測できましたが、日本大会との関連で年内に別に開催することは困難と判断の結果であることをご了承願います。HELの活動や、役員問題で意見も出ましたので、近日中に役員会を開催し、事情によっては臨時大会を開催して再度会員の意見をお願いすることも考慮しておりますが、その節にはよろしくご協力をお願いします。なお、当日協議された概略を下記の通り報告し御礼のご挨拶とします。

記

1. 議長には浜田国貞氏を選出した。
2. 88年の活動方針は前年度の活動を踏襲することにした。
3. 会計の決算及び予算を承認した。
4. 凍結資金の一部(¥103,000円)の役員会決定による支出報告を承認した。
5. 第53回HEL大会の開催日時、場所について次の通り承認した。開催日(89,9月中)、開催地(札幌)。
6. 役員改選について  
吉原副会長の辞任発言などがあり、役員補充等について役員会に委任を提案したが改選等は規約の通り臨時大会を招集し、民主的に行なうよう意見が出され承認された。

以上

HEL事務局長 宮岸 忠孝

★第52回北海道エスペラント大会の記録

第52回北海道エスペラント大会は札幌で開催された第75回日本エスペラント大会の第2日、8月21日(日)午前、同会場の北区・自治労会館ホールで日本大会の分科会として開催された。出席者35名。日本大会中とあって、傍聴者も多数あった。

今大会は日本大会との同時進行のため、最少限必要な報告、協議、人事に限定して、短時間で手際よくとの事務局の提案を受けて進行した。

大会議長に浜田国貞(足寄)を選出、開催地の吉原正八郎SE S会長のあいさつのあと、宮岸忠孝事務局長から活動報告と方針提案(「HEL 第52回大会議案」参照)があり、若干の質疑応答後、承認。続いて地方会から活動報告を受けた。

小樽(切替英雄):故・山賀勇の蔵書は整理され、札幌大学図書館に。図書館の都合で今は自由に閲覧できる状態ではない、もう少し待つてほしい。小樽での入門講習は2名申し込み、一人はすぐやめたが、もう一人はコツコツと継続。

苫小牧(星田淳):例年、市民館で初等講習。新聞に告知し、ポスターも貼るが、6月は申し込みなし。その後、2名の受講生を得てLa Teksto Unuaで講習中。公民館まつりには毎年参加していて、ちょうど今開催されている。

函館(岩井正久):函館では現在、岩井だけで、EKAROJの活動で全国と繋がっている。故・吉田栄の戦前からの蔵書、資料を一括して受け継ぎ、目録をフロッピー・ディスク化して年内にメドをつけたい。

札幌(児玉広夫):毎週土曜日、三つの継続学習グループが例会をもっているほか、入門講座も5,6人が引き続き受講中。通信講座も続いている。日本大会に大きな力を注いできたが、大会後このエネルギーがどう活かされるか注目したい。

岩見沢(宮岸忠孝)：若手の渡辺晋道が種を蒔き始めた。市立清園中学校では林喜久次教諭の指導のもとエスペラント・クラブが誕生した。

また今大会に参加している izolitaj membroj からも報告があった。

網走(坂下正幸)：日本大会に2名申し込み。仕事の都合で一人は来れなくなって、実参加は坂下だけとなった。

室蘭(須藤昭三)：故・平田岩雄の蔵書について市立図書館と交渉した結果、エスペラント・コーナーが設けられることになった。今、須藤が納本に備えて整理している。

札幌(水上侑子)：伊東三郎のもとで学んで以来、エスペラントとは離れていたが、これを機会に再び活動に参加したい。

札幌(留目昌子)：きょうは上の子は家において、下の子二人を連れて参加した。何年かぶりで北海道大会にでて来たが、日本語で議事がすすめられているのでホッとした。子どもたちがもっと大きくなったら復帰したい。

ここで、日本大会akeceptejoの佐々木将人(旭川)から当日午前10時現在の日本大会参加者数が告げられた。実参加 210名、未着21名、不在参加者 211名、合計 442名。北海道大会出席者は日本大会の盛会に拍手をおくった。

来賓として、中国・黒竜江省・ハルビンから長崎に留学中の f-ino KAN TjeCien (耿鉄珍) から流暢な日本語であいさつがあった。f-ino KAN は連盟の公式招待で道大会、日本大会に出席した。

87年度決算・88年度予算は砂野裕子、会計監査は阿部映子が、それぞれ日本大会事務局からかけつけ報告し、承認された。次期定期大会の札幌、来年9月開催も他地方会からの招致なく決定。

役員改選にかんして、吉原正八郎、切替英雄、河原一弥(いずれも札幌)から発言があった。今後、この件については役員会招集、さらに臨時大

会の招集も含めて検討すること、療養のため常任委員辞任の申し出のあった椿陽考(札幌)についてのみ欠員とすることにし、役員問題の討議を打ち切った。

浜田議長退任あいさつ、宮岸事務局長閉会あいさつをもって第52回北海道大会は全議事を終了した。大会時に新年度(88年~89年)連盟会費を納入した会員は43名、購読者5名だった。(Kk)

#### 第52回大会で選出された北海道連盟役員

顧問	相沢治雄(札幌)、江口音吉(小樽)、木村喜壬治(札幌)、高橋要一(札幌) 新田為男(由仁)
会長	三澤正博(札幌)
副会長	児玉広夫(札幌)、吉原正八郎(札幌)
事務局長	宮岸忠孝(札幌)
常任委員	星田淳(苫小牧)、北島瞳(苫小牧) 宮井康夫(札幌)、切替英雄(札幌) 河原一弥(札幌)
会計	砂野裕子(札幌)
会計監査	大友軒一(札幌)、阿部映子(札幌)

#### 88-89年 連盟会費受領者(8-21 現在)

阿部映子、砂野裕子、岩井正久、梅木孝昭、小淵修子、大野美恵子、カワハラ・カズヤ、影浦泰子、北島瞳、木村喜壬治、切替英雄、児玉広夫、小林貴貴美子、後藤義治、佐藤奈美子、佐藤布美子、佐藤みはる、佐々木将人、末永章子、坂本桂子、坂下正幸、須藤昭三、瀬川綾子、高橋要一、豊蔵正吾、留目雅之、留目昌子、浜田国貞、馬場恵美子、藤平あや子、星田淳、星田文子、前田幸一、牧敏弘、宮井康夫、宮岸忠孝、山口紀代美、山岸悦子、吉原正八郎、義村政見、横畑君枝、渡辺康子、渡辺晋道

札幌エス会では講習会のもち方について、活発な意見交換がされている。札幌エス会の入門講座担当の宮岸忠孝氏と、宮岸氏の提案に応える形であらたに初級講座を担当する渡辺晋道氏（札幌エス会青年部部長）の文章を掲載して、各地方会の講習会運営の参考に供する。 編集部

### 宮岸忠孝氏の提案

最近の札幌におけるE講習については、1984年 s-ino 小林貴美子らがEの普及発展を願って取組を始め4年を経過し、特に本年は日本大会の開催の若き原動力となったことはご承知の通りです。

この間に回数で8回（年平均2回）、講習終了者38名に達しておりますが、引き続き学習と活動に参加している人は17名（44%）に過ぎません。このデータは何を意味するかは解りませんが、引き続き講習を行なうことの必要だけは誤りのないことと考えております。

そのために入門講座は講習方法については常に検討を加える必要はあっても軌道に乗っておりますが、其の後の継続学習には現在のグループ方式では講師、会場、費用の諸点で限界になりましたので、Eの普及に関心と協力をもち、指導を担当できる方のご意見を得たく、この提案をする次第です。なお、私案としては

- 1、講座の開設 ①入門講座4ヶ月限度②初級講座6ヶ月③中級講座（文法、翻訳、文通等が主で会話は日常挨拶程度）1～2年間④上級講座（会話を中心に、通訳をめざす）2年間。上記の講座は希望によって留年することができる。
- 2、受講料 ①教材費：各講座ごとに決定②会場費：受講者数で割りプール制③講師謝礼：受講者数×1000円（4ヶ月毎）
- 3、1単位時間 2時間
- 4、その他 1講座の受講者数は最低3名。グループによる自由学習はこの案に含まない。

5、担当できる方は、講座名を記入して立候補して下さい。希望者が複数になった場合は相互協議で決定します。

### 渡辺晋道氏の初級講座要項

初級講座のカリキュラムは次のとおり。

語学学習において、その方法として、積極的なもの（能動的なもの）と消極的なもの（受動的なもの）の二者があります。話す、書くが前者であり、聞く、読むが後者です。この4点にまたそれぞれ前述の二義があります。

話すことでは自由会話と模擬会話であり、書くことでは自由作文と課題作文です。初歩の段階から多くを望むことは良くありません。よって、後者を選びたいと思います。

聞くことでは通訳することと理解に留まることであり、読むことでは文法的に解釈することと通読することです。これらは積極的に行なうべきものです。単語を覚えるよりも、文章に慣れることが大事であり、また、文法を学ぶことが語学上達に大きく係わります。

教材は“Facila skec-albumo”で、『イソップ再入門』『作文の教室』を適宜使います。

今回は残念ながらSES主催の初級講座でなくまた試行的講座ですが、SESの後援と資金援助を得られたことは、今後の布石になると確信しています。

以上の点に気を置いて新初級講座を進めたいと思います。

### Mateno en Sapporoを読もう！

いま注目の札幌E会青年部機関誌。たしかに Heroldo de HEL より、面白くてためになる。年6回発行、年購読料なんと1000円。

郵便振替：旭川 4-11065「マテーノ」



## 中国東北地方のエスペラント運動 (1)

札幌 三澤 正博

### 瀋陽の趙承華さん

札幌市と中国の瀋陽市とは姉妹都市である。その瀋陽で活躍しているエスペランチスト趙承華氏のことを書こうと思う。彼は瀋陽市人民政府外事弁公室（市役所の国際交流課にあたる）に勤める若手幹部である。31歳。私は、一昨年、北京での世界大会に出席したあと瀋陽を訪れ、姉妹都市の縁で他の三人の札幌・北海道人と共に、大歓迎を受けた。昨年秋には、また日中エスペラント交流団に参加して訪中したが、北京に着いた私に会うためわざわざ飛行機で飛んできて再会。そして今度が三度目で、外事弁公室の公式招待を受けて17日間彼と行動を共にし、瀋陽、哈爾濱（ハルビン）など中国東北地方のエスペラント運動の実状を見聞することができた。

趙さんという青年を通して、現在の中国東北におけるエスペラント運動の裏表について、私が受けた印象を書こうと思う。

彼は見るからに精悍で敏捷、たくましく行動的である。私は初対面のときから、彼の中に北方騎馬民族の末裔を感じていたが、今回それが事実であることを知って愉快だった。清朝初代のヌルハチの墓陵である福陵（東陵）を訪れた際、満州八旗を指さして、「家系図があるわけではないが、母が語るころでは、祖先はこの旗のどれかに属していた」と彼はニヤニヤ笑った。彼との会話はたまたま漢語を混えることはあったが、すべてエスペラントであったことを念のため、つけ加えておく。彼の御両親は遼寧省岫岩県の農民で、その後1955年瀋陽市重型機器工廠の労働者となり、現在は退職されている。彼自身は、1957年瀋陽市生まれ、75年中学卒業後77年まで下放で農業労働者として働く。77年から79年までは、錦州で兵役につ

き、80年から85年まで瀋陽電力機械廠で労働者として働いた。85年瀋陽市科学技術協会、すぐに転職87年いっぱい、瀋陽市旅遊局に勤めた。そして今年88年1月から市政府外事弁公室世界語部（エスペラント係）に入った。私が根掘り葉掘り聞いたのには訳がある。彼は、青年期を中華人民共和国の成長とともに、文字どおり労・農・兵として過しているという事実である。つまり、日本流に言えば、彼は学校出のインテリではない。日焼けした顔、骨太の長身、大声で喋りまくる、いつも走っている——黄塵の中を騎馬で疾駆したらびったりだと、しばしば想像して一種の羨望をすら感じた。

とはいっても、彼はきちんと大学を卒業している。80年から83年まで、労働者として昼間働きながら、瀋陽師範学院中文系（国文学科）夜間部を卒業した。彼には弟さん一人と非常に美しい妹さん二人がいて、いずれも上記重型機器工廠で働く一言で言えば労働者一家である。奥様は中国国民党革命委員会瀋陽市党委員会で働いておられるとのこと。「台湾の国民党とは違いますよ」と彼は笑った。3歳のお嬢さんのパパでもある。

さて、この彼がどこでエスペラントを学んだのか。78年、21歳、兵役にあったとき、中国でも著名なエスペランチスト方善境氏からほどきを受けたという。文化大革命終了直後のことで、教える側の熱気がそのまま趙青年の血を踊らせたに違いない。83年、大学夜間部を卒業した彼は、大学で学んだ英語は「忘れて」、勤務先の工場の文化宮（労働者の余暇活動施設）でエスペラント学習運動を始める。ここが彼のエスペラント運動の拠点である。一昨年、札幌・瀋陽世界語者交流会が、この青年文化宮で行われた謎が解けた。仕掛

人は趙青年だったのである。

中国におけるエスペラント運動の発展の鍵の一つは、労働者、農民、学生、つまり市民に無料で開放されている青年文化宮の存在だろう。彼らはわれわれ日本人と異なり、公式で無料のたまり場を享受しているのである。大きな職場（単位＝タンウェイという）は独自の文化宮をもっている。瀋陽重型機器工廠はその一つだろう。同工廠世界語協会の主席は王保華氏だそうだが、実際にエスペラントの指導をしているのは趙氏で、毎週日曜日2時間ないし4時間、授業をする。83年から3期やったそうで、第1期は120人、第2期は100人、第3期は100人の受講生だった。

瀋陽に行く迄、私は当然、地域の文化活動団体としての瀋陽世界語協会というものを想像していたのだが、趙氏によると、以前は大衆団体であったが、現在は市の外事弁公室の組織となっていて2000人余りの会員がいるという。だが、残念ながら、これらの会員が具体的に、どの場所で、誰によってどう学習しているのか、その現場を実見することができなかった。ただ、趙氏によれば、彼自身が出講した学校等は、瀋陽冶金専科学校、瀋陽科学技術協会、第八〇中学、第一二四中学、第一〇一中学、瀋陽大学、鞍山、遼陽、大連海運学院等々かなりの数にのぼっている。前後10日間ほどの滞在だから実見の暇もなかったわけだが、私の受けた印象を率直にいうならば、趙承華氏個人の火のような活動だけが強烈である。

趙氏のいう瀋陽市人民政府の一機構としての瀋陽世界語協会とは別に、遼寧省世界語協会という民間団体がある。所在地は瀋陽市皇姑泰山路一段一号で、この団体は今年88年1月『緑星 VERDA STELO』という機関誌を創刊している。私は時間不足で、招待を受けながら訪問することができず残念に思っている。いずれにしろ、各種の組織や団体が誕生の声をあげ、全体として学習活動が活

発化していることは嬉しいことである。大小さまざまな団体が自由に活動し、国境を越えて人間同士が交流するするのが、エスペラント運動の本質である。この100年間、エスペラント運動は、このようにして、ゆるやかに発展してきたといえよう。

このように考えるとき、今日の中国における世界語学習運動は、爆発的といってよいほどの猛烈な勢いで発展している。この秘密はどこにあるのか。一言でいうならば、国家がエスペラント運動を支持しているからである。76年、周恩来首相と毛沢東主席が亡くなり、77年8月中共11全大会で華国鋒が文化大革命の終結を宣言したが、早くもその翌年、79年中国共産党中央宣伝部は第22号公文をもって、エスペラントを普及するよう各省各市に指示している。前述の様に、それはちょうど趙氏がこれを学習し始めた頃のことである。ついで、82年、国家教育部（文部省にあたる）が「教高1-107号」公文を通達したが、これは実に世界のエスペラント運動史上、画期的な施策といってよいだろう。これによると、先ず、条件の備わった大学はエスペラントの科目を開設すること、そして今後、卒業試験、幹部登用審査、大学院受験などの諸試験にエスペラントを第二外国語の一つとして認めると規定したのである。このような施策の流れの上に、86年、北京での世界エスペラント大会が開催されたのである。そのテンポは異常に速い。文化大革命によって圧縮された民衆のガソリンに国家が火をつけたような、といったらい過ぎだろうか。ともかく、ろうそくの火のような日本のエスペラント運動の眼から見れば、対岸の火は爆発に見えてくる。文革終結宣言以後、ちょうど11年が経過した。爆発的な学習運動はやがて鎮静化し、しかし、国家の支持のもとで他国には見られないような発展が続くだろうと私は考えている。

中華人民共和国は、その面積においてヨーロッパ全域をカバーするほど広大であるし、人口については言及するまでもない。言ってみれば、ヨーロッパ全域に等しい地域にエスペラント通用圏が突如、出現したのである。しかし間違っただけではない。出現したのは通用圏であって、通用そのものではない。その実現化への方途は、エスペラントを学ぶ者自身が握っている。中国共産党と国家教育部の通達は、世界語者にとって未曾有の、ありがたい贈物であるが、それがお上からの贈物であることも知らねばなるまい。事実、中国にあっても、地方地域によって世界語運動にかなりの差異があると聞かされた。そうしたなかで、瀋陽市の場合は、情熱的な活動家・趙氏個人と市人民政府とが理想的に提携した事例として注目されてよい。趙氏自身の語るところによれば、瀋陽市の世界語運動を支持しているのは、市政協商委員会副主席の馬秋風氏（名誉理事長）、外事弁公室主任の婁国臣氏、市宣伝部副部長の鄭幫俊氏、市旅遊局長の干洪俊氏（理事長）、同副局長の董光氏（副理事長）、その他に、商協局副局長の劉樹恒氏、瀋陽大学校長の陳洪賦氏、瀋陽師範学院副校長の祝爾家氏、瀋陽冶金専科学校長の干勤之氏、中国医科大学瀋陽第三医院教授の項全申氏などで要するに、瀋陽市のお歴々が顔をそろえているのである。趙氏は何度となく「政府が自分を支持している」と強調していたが、その瀋陽市人民政府とは日本流に言えば市役所のことで、前述のように彼が所属することになった外事弁公室とは国際交流課ということになる。趙氏は日本流に言えば一地方公務員なのだが、「人民政府」とはその名のとおり、市役所とは趣きが異なり、門衛に軍服の歩哨が立っているような建物である。私は、表敬訪問して彼の職場を実見したいといったが、これはことわられた。外事弁公室はたくさんの係を置いているが、その一つとして世界語交流を専担

する係があり、そこに趙氏とその助手をつとめる美しい娘さんの曾曼（ツェンマン）さんがいる。彼はことごとに「自分は権限をもっている」と語り、他の民間世界語団体とは違って、経済的援助もあると誇っていた。

事実、私はこの外事弁公室から正式の招請状をもらって、所要経費の一部も上が負担してくれたのである。17日間に亘る私の個人旅行の初めから終わりまで、当の趙氏が付添い、助手の曾曼嬢も私のために走り廻った。こういうことは他では起き得ないことだろう。「これが自分の仕事だから」と趙氏がいつていたが、エスペラント交流が市役所の公務りとなっているという事実、我々は先ず驚く必要がある。そして、次に、我々がこれにどう対応すべきかを考えねばなるまい。とにかく、瀋陽市はこのように世界語交流に積極的であり、先進地域である。私の眼に映った限りではそれは趙氏個人の活躍と見えるが、最初はどこでも情熱的な個人から出発するということも真だろう。

「先進」ということを今回事実をもってつきつけられたのは、遼寧電視大学（遼寧放送大学）作成による世界語講座の放送である。昨年11月、北京に行った時、私に会いに飛んできてくれた趙氏が私に小さな本を贈呈してくれた。それは、彼自身の著わしたエスペラントの教科書だったが『趙承華・張志明編著、張家声校閲、世界語課本、瀋陽市世界語協会、遠距離教育出版社、1987』とあった。私は専門がら、「遠距離教育」という初めてみる単語に興味を覚え、何のことかと質問すると、彼は待つてましたとばかり、彼が行っているテレビ放送のことを説明してくれた。この本はテレビによるエスペラント講座のテキストだったのである。しかし、その時は十分に時間がなくて詳細を聞きとることができずに別れたのであるが、今回は、双方ともが、そのことについて具体的に

知りたい、知らせたいという気分であった。昨年10月、青島市を訪れた際、目下テレビによるエスペラント講座の放送の準備中とかで、スタッフらしい人物、キャストらしい面々にお目にかかったが、彼らは中国で「初めて」の試みと称してはりきっていた。その直後に北京で趙氏に会って、上記のように、目下、テレビ講座実施中と聞かされたので、その事実を知りたかったのである。

「最初、だれがテレビ講座のことを発議したのか」と私が質問すると、「自分だ」と笑う。「みんなが賛成したか」と尋ねると、「どうしてどうして」という顔つきになって、説明が始まった。瀋陽では、放送による外国語講座は、テレビ、ラジオとも英語、日本語、フランス語の三ヶ国語だが、そこにエスペラントが割り込んだわけである。初め、遼寧放送局に何度も足を運んで幹部を説いたが、聴取者が伸びないことを理由に、全員反対だったという。そこで、市政府の指導者たち、すなわち前記の諸氏らに説いて廻ったらしい。彼らは趙氏に賛意を示し、放送局を促し世界語講座の開始にこぎつけたという。その作業はとてもないへんだったという。いずれ、当たって砕ける式のいかにも彼らしいやり方だなあと、私は彼の陽焼けた顔をみながら思った。それは1986年末のことだそうだ。最初の放送は87年4月に始まり12月に終わったが、趙承華先生の世界語講座のタイトルは『未来の声エスペラント』というのである。だが、いくらなんでも、これだけの放送講座を彼ひとりで作れた筈がない。ここに登場するのが放送大学である。私は遼寧広播電視大学を訪ねて、二人の副校長孟憲綱氏と李庚心氏、製作スタッフの呉徳年氏、侯成銓氏、商国忠氏らと会見することができ、スタジオを実見することができた。そればかりか、このとき撮影されて、それが学生募集の公告放送に使われる破目になった。広播電視大学とは耳なれない語だが、要するに日本でいう

放送大学で、広い中国のことだから各級レベルの多種のものがあ、その威力は大きい。称して、「遠距離教育」のある所以である。つまり、瀋陽市の世界語講座は、放送大学のスタジオで製作され、放送大学の科目として学生を募集し、瀋陽放送局から放送されたものである。趙氏は、自分の学生は五万といふ（数えきれない）と自慢したが、事実、聴取者は数えきれないだろう。

二度目の講座放送は、8月3日から89年2月までの予定で、一課（一回の放送）25分間、50回の予定と聞いた。ちょうど私が瀋陽滞在中の6月27日夕方から今期の学生募集のための3分広告放送が始まり、女性アナの声で解説が流れ、画面に趙氏のほか私まで映されて「日本北海道・・・三沢先生のいうところによれば、この放送は・・・」と7月いっぱい1日3回ずつ遼寧省全域に放映されるといわれた。その夕方、趙氏は待ちかねたように画面に見入り、「始まった、始まった」と子どものように手を打って喜こんだ。その上、私に向かって「あなたは札幌でより瀋陽で有名になってしまった」とふざけた。前述の中国国家教育部の方針、瀋陽市人民政府の支持、放送大学の課程に組み入れられたということ、それにマスコミという手段を用いてのエスペラントの学習普及活動は、日本の現状と比較すると途方もなく先進的である。（次号に続く）

#### EL POPOLA ĈINIO のご案内

中国の市民生活から中国と世界のE運動まで話題満載の全文E雑誌。購読者には毎月中国から直送されます。

☆購読料 1年 3000円、2年5400円  
3年 7500円

☆申込先 振替 小樽 1-34034 北畠隆  
(住所・氏名は漢字とローマ字で)

## 小樽にて、山賀勇先生を偲ぶ

和歌山 前田米美

山賀勇博士とのご縁で、和歌山から御誌の大切な紙面に少し侵入させていただきます。たぶん、HELの皆様は、和歌山からどうして？ と不思議に思われる方も多いと思います。

敗戦後しばらくして、和歌山市にも「緑丘会」が再び息をふきかえました。しかし、生活に追われ、今ごろなんで国際語エスペラント？ と、我も思い世間でもそう思っていたようでした。

集って来た連中は、でも皆エスペラントが大好き。(これは戦前、和歌山に種を播いた方々の功績)。前田はその他に、まがりなりにも雑誌作りが好きで、ガリ版筆耕の内職をやりながら、会誌 VERDA MONTETO を出し続けておりました。

戦後の虚脱、戦争への悔恨、今後進むべき途の模索。判断の手がかりとなるべき情報の不足。当時は新聞の記事さえも、あまり信用する気になれませんでした。世界のいろんな人から偏らない情報を手に入れる最良の国際語こそエスペラント。少なくとも、直接なまの声が聞けるのがエスペラントと考えて、世界平和論の誌上討論をおこがましくもやり始め、アメリカ、オーストラリア、スエーデンあたりから数通、すごい投稿があったと記憶しております。

当時はまた、「エビでタイを釣る」と申しまして、見すばらしいガリ版雑誌でも、外国の全国雑誌の会に送ったら、すばらしいエスペラント会誌が手に入ったものです。なぜか日本に大へん興味を持っていたようでした。

しかし国内の現実はその甘くありません。例会の常連がぼつりぼつりと減ってきた頃、会誌だけは、会の唯一の生けるしるしとばかりがんばっておりましたが、紙は不足だし、郵送料は国内外ですから大へんかさむしで、苦しくて、毎月会誌紙

上で「会費を送って」と盛んに懇願しておりました。

その時、小樽の山賀勇氏から、為替でどっさり払いこみをしていただき、また切手もたくさん送っていただきました。こんなに遠くの地からの暖かい励ましに、会誌作りは一層活気づきました。何時かは参上してお眼にかかり、お礼を申しあげなくてはと思っておりました。

このたび札幌で日本大会が開かれると知った時私はすぐ山賀先生のことを考えました。R087年8月号の江口音吉さんの記事で、亡くなられたことは承知していましたので、せめてご霊前にご冥福をお祈りし、お礼を申しあげるつもりで、参加を申込みました。大会中HELの皆様からは、この事についてご親切にいろいろご助言、ご配慮いただき、結局8月22日の夜、切替英雄さんのお宅にお邪魔して、先生をお偲び申しあげた次第でした。帰途タクシーを降りて見た、先生の旧宅2階の窓の「エスペラント教室」の文字は実に感慨深く、今でも鮮明に脳裏に焼きついています。

前田氏は日本大会に第1番で参加を申し込まれ、会場でのパネル展でも緑丘会の出展でご協力いただきました。今回、本誌への寄稿にも快く応じてくださいました。

編集部

La 15a, marto, 1928

けっして過去のことでない！ 自らもあの暗黒時代のテロルに仆れた小林多喜二の不朽の名作『1928年 3月15日』。貫名美隆訳、86年刊行、110p、1200円。(もよりの書店で日本E学会発行と指定して注文して下さい)

## 第75回日本大会雑感

室蘭 須藤 昭三

20年前の札幌大会についておおくの方が言及されていた。あの大会に参加していたのかどうか、忘却の彼方——とまでは言わないが、部厚く積まれた写真アルバムの中から1968年8月3日-4日の第55回大会記念写真を発見した。同時に出てきたのが、1966年7月に受けた普通試験の合格書と成績書で、いささかショックで恐縮してしまった。かくの如きものこそ忘却の彼方へ押しやっておかなければなるまい。ご高名な方々とお顔を確認しながら時の流れを数えたが、確実にエスペラントは受け継がれていると確信して心強い。国内大会はもとより、世界大会への出席もされている地元大会組織委員の方々なので大会雰囲気は、なごやかで活気があり気持がよかった。

催し物も多かった。学生演劇もよかった。司会者の言葉ではないが、観覧者の多くも感情を押していたのが比較的后方に位置していた私からよく

窺いえた。私自身も涙が、果たして何に対して浮かんで来るのか感情をそらし乍ら（涙を押さえるため）考えていた。観覧者の感情が移るのか、学生諸君も一生懸命演じてくれた。感謝したい。

影絵劇も、私は初めて見る体験だが、それよりも、自分の人生を一途に進んでいる、そんな意味で敬意を表したい。大会記念品のユーカラは貴重である。

これは私の考えだが、エスペランチストには奇人変人も多いが、みんなボンコーラ（コココーラではない）の人達で一杯であり、こんな雰囲気は私は好きである。

よく飲み、よく食べたガーヤ・ヴェスペーロの楽隊は何だろう。植民地にいるような感じだったが、これは大会と関係はない。

(8月22日記)

## 感動を呼んだ日本大会

札幌 山口紀代美

「お盆を過ぎれば、もう秋」という札幌なのに、例年になく当日は朝から真夏を思わせる太陽が聖火のように燃えたぎり、大イベントを祝福しているかのようなようだった。中心スタッフの方々は大連日の寝不足の目をこすりながら、開館前から最終的な準備に入り、リンとした緊張感みなぎる中で立ち働いていた。

23年前、初めて参加した世界大会のポストコングレーソ（京都）での強烈な感動が蘇り、胸を熱くしていると、その折に知り合った懐かしい顔、黒田正幸先生やマクギル氏らが次々に来場されて来た。その瞬間、まるでタイム・ボカンに乗船し

たような、うれしい錯覚に陥って、しばし時を忘れてしまった。

いよいよ大会開幕。いつの時もそうだが、エスペーロの斉唱にはジーンとくる一体感があり、私もお弁当準備の作業の合間をぬって一同に加わり大声で唱和した。ホール前のテーブルにお弁当を並べながら、プログラムが無事進行していくのを聞いていると何やら急に異様な拍手の波。「ノリにノッテルなー」と思っていると、何て素敵なハプニング！ プログラム外のペルーの人形劇団クシクシの飛び入りがあったらしい。木村喜壬治先生が呼び起したラッキーな偶然である。

第75回日本エスペラント大会閉幕  
(1988, 8, 20/21 札幌市)

第75回日本エスペラント大会組織委員会  
委員長 吉原正八郎

過日、札幌において第75回日本エスペラント大会を開催するにあたりまして貴エスペラント会などのご協力で盛大に終了することができました。今大会は、ご承知のとおり20年ぶりの札幌での大会で参加者の予想がむずかしく満足のいただける開催が危ぶまれておりました。しかしそれにもかかわらず、おかげをもちまして参加 234名、不在参加 223名と 450名を越す過分の申し込みを頂くことができ感謝の気持ちでいっぱいです。

あらためて申すまでもなく、この盛会は貴会はじめ全国のエスペランティストの心暖まるご尽力によるものです。ありがとうございました。

これからの御地のエスペラント運動の発展をお祈りして、お礼のことはばに替えさせていただきます。どうぞ会員の皆様にも宜しくおつたえ下さい。

\* \* \* \*

組織委員会の最終集計による参加総数は461名(実参加 238、不在参加 223)、Gaja Vesperoには137名。また札幌E会青年部・「エスペラントの世界」共催の大会後 Ekskurso に35名が参加したほか、閉会式後の一般公開プログラムには50人を越える市民がつかめかけた。

“Kongresa Libro -- La Dua Parto”が、まもなく発行され、全参加者に詳細が報告される。

\* \* \* \*

大会関連記事掲載のE誌(編集部着分)

La Movado(9)、La Revuo Orienta(10)、エスペラントの世界(10)、PONTETO(10)、La Tamtamo(10)、La Paŝoj(9)、Mateno en Sapporo(10)。( )内は掲載の月号数。その他についてお知らせ下さい。

昼食タイムは私たちの出番である。大会前、お弁当係の末永章子、渡辺康子両夫人に私に加わり、決して大和撫子とはいえぬ主婦三羽鳥、みかけはしとやかに、中身はせこーく、値段交渉に掛け合っって思惑通りの予算となった品である。「一品二品三品・・・」約束通りのお惣菜が入っているかのチェック、お替りを予測しての冷茶の準備、お弁当の過不足の調達と処理など、末永チーフを始めそこは主婦の心配りの細やかさ、一つの無駄も出さずピツタシ・カンカンとなり、メデタシメデタシだった。また、食後のデザートとしてアゴ氏の手作りケーキの「店」がお弁当売場の前にチャッカー設けられ、そこも大盛況。「海外からの参加者は各々故郷の品を持ち寄り並べれば、ミニ版『食の祭典』となり、楽しいだろうナ」と夢は広がる。

大会2日目もまたバカ天。「来ないで！」と懇願する実姉・後藤純子を無視して、「外国人と話そう」の分科会に参加した。「ウワァ！来た」まるで化け物でも見るような目つきで大歓迎(?)する姉は、この会の司会・進行係である。さっそく自己紹介が始まり、司会者の方に向いての会話態勢である。“Mi estas via fratino”。そして「エスペラントは姉といっしょに始めたが、mal-diligenta なため、姉と違っていまだkomencantoです」。一寸からかってやったら姉のテレは極度に達していた。(ウシシ)

この大会は大成功となった。「大成功」。この三文字の証として、最後に、大阪、名古屋の方々から直接耳にした絶賛の言葉を列記しておこう。

「いろいろな大会に参加したけれど一番充実していた」

「かゆい所に手の届く受入れ態勢だった。バンケードも楽しかった」

「すばらしかった。札幌の人には脱帽した。来年も札幌でやってほしい」

## 力強い Esperantujo

岩内 桜居 甚吉

待望の第75回日本エスペラント大会が札幌で開催された。

北海道教育大学弦楽オーケストラの若人たちが静かな序曲を奏でている中、北海道自治労会館の広い会議場は全国及び各国の *geesperantistoj* によって、ほぼ埋め尽くされていた。

中高年の *veterana Esperantisto* と、たったいま萌え出たばかりの初々しい若人とが、ほぼ半分づつ混然としてこの大会を盛り上げている。

誠に力強い *ESPERANTUJO* である。

この全国大会を精力的に準備していた、山賀勇 *HEL* 元会長は一昨年、突然死去。また同じ年、この大会開催の下見に元気で北海道大会に来られた前 *J E I* 理事長の磯部幸子女史も急逝、この大会を見て頂けぬのは誠に寂しい。

永年『北海道エスペラント運動史』の編纂に努力して来られた長老の相沢治雄氏が病をおして出席、あの大きな眼で会場の隅々まで、しかと眺めていた姿が印象的であった。

第1日午後6時からビール園・紅桜庭園で *Gaja vespero* が開かれた。同庭園の広い2階を占領して、ビール飲み放題、ジンギスカン食べ放題の夕食会は、向こう端が見えない程の煙が立ちこめる中、ビールの酔いがまわるにつれ、心の壁が取り払われて、耳を聳する *Jazz Bando* の *servo* に言葉通り *gaja* のるつぼの中で楽しいひと時をすごした。

各分科会も充実した論議を尽くし、21日、大会は終了した。参加者がお互いに交わす "*Ĝis revido*" には、名残惜しさと一抹の空しさがこもっていた。

次に全国大会がまた札幌で開かれるのは、何時のことであろうか。おそらく21世紀のことであろう。その時の全国大会はどんなであろうか。素晴らしい大会にして頂くことを、今萌え出たみずみずしい *gesamideanoj* をお願いして、筆を措く。

(8月23日記)

### 姉妹都市から日本大会にメッセージ

アメリカ・ポートランド市のE会会長の *S-ro Jim Deer* からビデオテープによる *mesaĝo* が届けられ、定例のあいさつ、日本大会への祝詞とボ市の *Roz-festivalo* の情景が30分にまとめられていた。彼は、以前に行っていた *ekvinokso* (春分、秋分) と *solstico* (冬至、夏至) の行事 (ブルガリアと3つの会でやっていた) を仲間を増やして復活させようと強く希望していた。

そのブルガリアの *Trajana* の *S-ro Petko Bonev* からも *mesaĝo* があったが、受取ったのが残念ながら大会の翌日だった。その中に星田夫妻を含む6人の日本の *korespondantoj* の名前が書かれていた。

札幌で冬季五輪があったとき、2-3度やりとりしただけで途切れていた *Munkeno* のE会会長 *S-ro Uli Ender* から「*gratulon* と *sukceson* を願い、両市間の *Esperantistoj* の友情を深めたい」との *mesaĝo* もあった。

(札幌 木村喜壬治)



## Pri la dua eldono de Ainaj Jukaroj

KIRIKAE Hideo

Multaj Esperantistoj en Hokkajdo kunlaboris antaŭ naŭ jaroj por publikigi la unuan esperantan eldonon de Ainaj Jukaroj ( HEL, Sapporo, 1979; originale, ĈIRI Jukie, Ainu Ŝin'joo-Ŝuu, di-kantaro de la aina gento, dulingva, aina kaj japana, Tokio, 1923 ). Nun ni havas la duan eldonon. S-ano HOŜIDA Acuŝi estas la redaktinto de la nova eldono. Ni elkore laŭdas lian strebon por la nova eldono. Estas sendube, ke sen lia sindono, ne nur la dua eldono sed ankaŭ la unua ne aperus.

La nuna eldono estas pli bona ol la unua en jenaj punktoj.

1. Nomo de redaktinto estas priskribita.
2. Bibliografiaj klarigoj pri la originara kaj ceteraj libroj estas aldonitaj. (La esperanta traduko estas bazita ĉefe sur la japanaj tekstoj en la originala libro.)
3. Peco de la originalaj tekstoj ainaj estas aperigita.
4. Gramatika klarigo kal vortareto por legi la aperigitan originalan pecon estas aldonita.
5. Tipa formo kaj formo de la libro fariĝis multe pli elegantaj. Pri tio oni dankas al ĉarma Esperantistino, KIKUSIMA Kazuko (Krizantemo) el Tokio.

Tamen en la nova eldono restas ankoraŭ kelkaj difektoj. Mi kritiku ilin, ĉar mi kredas ke kritiko pri ili estos tre utila por tiuj, kiuj planas verkadon aŭ redaktadon; estos utila precipe por publikigi kunverkitan libron.

Mi pensas, ke ĉiuj difektoj de la Ainaj Jukaroj eliĝis el unu komuna fonto. Tio estas ke la redaktinto ne ŝatis originalecon. Por ekzempli, mi pritraktu nur unu el la malbonaj punktoj.

Oni ne povas scii, kiu estas la tradukinto de ĉiu peco de Ainaj Jukaroj. Por priskribi respondecon de la traduko, nur la nomoj de lingva kontrolinto kaj anoj de "traduka grupo en Hokkajda Esperanto-Ligo" estas donitaj. Mi rekomendis al la redaktinto antaŭ la publikigo de la dua eldono, ke priskribu nomon de tradukinto de ĉiu peco. Tamen li malakceptis la proponon kaj diris, ke li kaj MATUBA Kikunobu tute korektis preskaŭ ĉiujn originalajn traduktekstojn, tial oni ne povas rekonii, kiu estas la vera tradukinto de ĉiu peco. Aldonate al tio li diris, ke unu el la anoj de la traduka grupo malakceptis lingvan kontrolon. Mi demandis, "Kiu li estas, kaj kiun rakonton li tradukis?" Li ne respondis, sed nur diris, "Se vi tralegas, vi ekkonos, kiu teksto ne estas kontrolita". Stranga maniero de redaktado! Tiel malklara redaktado certe malagrabiligis la tradukajn grupanojn.

Mi kredas, ke ĉiu verkaĵo enhavas spriton de ĝia verkinto. Se redaktinto kaŝas la nomon de la verkinto, aŭ se li farus ŝanĝon al la verkaĵo tiel, kiel legantoj ne povas rekonii la originalan verkinton, la spirito de la verkinto mortus. Rememoru, ke "Frazaro estas homo" (= frazaro havas personecon). Se redaktinto aŭ lingva kontrolinto tute reskribus la originalon, la reskribinto mem fariĝus verkinto. Do li devus subskribi sub la titolo kiel verkinto anstataŭ la unua verkinto. Cetere, mi malamas frazaron sen subskribo. Ĉar verkinto de sensubskriba frazaro kaŝas sin antaŭ leganta publiko. Tio signifas, ke li forĵetis sian respondecon pri la verkaĵo. Mi malamas ankaŭ pseŭdonomon je la sama kialo.

Mi esperas, ke verkintoj ŝatu sian originalecon, kaj redaktintoj ŝatu

originelecon de verkintoj; ambaŭ konsciu sian propran respondecon, sian propran personecon kaj sian propran dignon. Mi bedaŭras plej multe, ke la sama sinteno de redaktinto de Ainaj Jukaroj kiel al la tradukaj grupanoj troviĝas ankaŭ en la traktado de la originalaj japanaj tekstoj de ĈIRI Jukie.

Tamen, ĉiu libro havas malbonaĵojn. Nenie estas senmanka libro. Malgraŭ kelkaj difektoj, Ainaj Jukaroj elstaras kun granda valoro en la literatura mondo de Esperantistoj. Mi elkore esperas, ke multaj Esperantistoj legu kaj amu ĉarmajn rakontojn de Ainaj Jukaroj.

## “Ainaj Jukaroj” の再版について

苫小牧 星田 淳

今次（第75回）日本大会の準備の中で記念品として再版することとなり、初版を出した時の因縁から私と、アイヌ語専門家の S-ro 切替英雄の二人に任せられた。初版のとき外国の読者から「アイヌ語についての解説がほしい」との意見があり、いつか取り組むべき課題と思っていたが、数年前札幌で S-ro 切替に話したところ、「やりましょう、少しずつ書いてみます」とのことだった。そこへこの再版決定があり彼の解説文の出番が決まったわけだが、彼の勤める北海道大学文学部言語学教室の仕事は多忙を極め、連日夜半近く終電車で帰宅する状態で、大変なことだったと思う。

改訂の方針については札幌や苫小牧で何度か会って打合わせた。ほぼその合意によって進めたが意見が一致しなかったところもある。ひとつはアイヌ語の表記。esperantisto向けの表記にしたかったが、現在のアイヌ語研究者の表記の一部改訂とし、説明をつけることになった。もうひとつ彼から要請されたのが、あの中の名篇の訳者の名を出すことだったが、これは初版の時の申合わせによって出さなかった。

誰がどの篇を手がけ、どう訳したか——これは初版の訳にかかわった人なら皆わかっている（も

うわすれた人も多いか？）。LEONTODO（以下L）N-ro58（1-1976）の p38にその表が出ている。また、当時の各人の訳文も、Lに時々出ているが、本にまとめたものとはずいぶん違うこともわかるだろう。理由はL. N-ro64（7-1979）p8~10にある通り、監修者 S-ro 松葉菊延と私が連絡しながら行なった添削で変わっていったため。詩としての形を整えるためには止むを得なかったと思う。

1976年3月24日、山賀勇宅でのユーカラ翻訳研究会の打合わせでは、「発表の際、一篇ごとの訳者名は出さない。共同翻訳だから」と申合せ、翻訳グループ全員が了承している。

タイプ、造本計画は全面的にS-ino 菊島和子にお世話になった。間に世界大会が入り（彼女は旅行団の世話でロッテルダムへ）、最後のタイプ打ちは8月13日の帰国後。S-ro切替も上京し、打ったものをその場で校正してくれたが、大変な作業だったもよう。盆明けの8月17日すぐ印刷、翌18日夜、大会に必要な二百部だけを札幌へ運び、ようやく袋づめに間に合った次第。

Koran dankon por la laborego de gesamideanoj 切替 kaj 菊島!

第75回日本大会の記念品として再版された“Ainaj Jukaroj”（北海道E連盟、1988年）の実務にあたった切替、星田両氏から、再版編集の経緯について寄せてもらいました。編集部

# 美しいユーカラの心を世界に

故知里幸恵さんのアイヌ神謡集

エス・ペラント版完成

和訳の適切さが評価

文化記録の貴重な遺産に

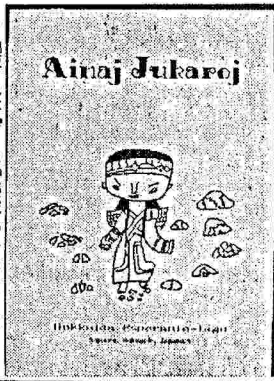
大正十一年、十九歳の若さ、世を去った知里幸恵さんの遺著「アイヌ神謡集」のエス・ペラント版が、このほど道内エス・ペラントの手で出版された。二日から札幌市で始まった第七十回日本エス・ペラント大会で記念品に配られたが、関係者は「美しいユーカラを世界に紹介する一助」と張り切っている。

知里幸恵さんは差別生まれの死後、年自に出版されたもののアイヌの女性、高橋孝子の故知里真志保氏の姉で、旭川の小学校、女学校を出、東京、一馬幸太郎の正産、和訳の故金田一京助氏に師事して、

アイヌ神謡集には幸恵さん、たほか、アイヌ文化を初めて、

アイヌ自身が記録した貴重な遺産にもなっている。

エス・ペラント通訳の有志たちが、この本のエス・ペラント版を思いつめたのが十六年前、現在、札幌エス・ペラント全副会長の尾玉広夫さん、六十人が八年がかりで翻訳した。初版は八年前、五百部印刷したが、まもなく、体積も十分でなかったため、今回札幌で日本エス・ペラント大会が開かれるのを機会に再版を計画した。新しい本はエス・ペラント版ばかりでなく、ユーカラの二編「カムイ・ユーカラ」に、幸恵さんのローマ字表記や、アイヌ語文法の説明も



出版されたアイヌ神謡集のエス・ペラント版

入れ、アイヌ語を分かるとすぐ紹介する形になっている。

Bも判、四百十四円で表紙や文中のさし絵には初版の際、協力してくれた日高賢三、三石町の彫刻家の現物の絵を使った。今回も五百部印刷したが、反響が予想され、札幌エス・ペラント会では希望に応じ増刷を検討している。

『北海タイムス』1988年8月21日(日)朝刊

星田淳編、1988年 北海道E連盟刊

## Ainaj Jukaroj

アイヌの口承文学『ユーカラ』（知里幸恵・日本語訳）を北海道連盟翻訳グループがエス・ペラントに。

79年初版にあらたにアイヌ語文法解説・小辞典などを付け加えて今夏、新装再版！

定価1000円（〒250円）

〒004 札幌市白石区東札幌2-6 尾田ビル2F 中央オフィス学院気付 北海道E連盟 ☆振替 小樽 17075

### ★編集部から会員・読者へ

あたらしい編集部になって一年が経過した。なんとか隔月発行に近くやってきたが、寄稿者、読者が機関誌を支える意味は大きい。もっともって原稿、情報、意見を寄せてほしい。

E文の不足をまた指摘された。これは個人的にも厳粛に受けとめている。(KK)

編集部 高橋要一（編集長）

カワハラ・カズヤ、馬場恵美子

Heroldo への郵便物は直接、

〒004 札幌市白石区もみじ台東1-1-6-304

カワハラ・カズヤ まで。

（連盟経由より早く、確実です。）

## “Mateno en Sapporo” (I. U.) の 伝説と事実

苫小牧 星田 淳

「事実」と「伝説」は時に見分けがつかなくなることがある。N-ro23(p.1-2)、N-ro25(p.2左下)の記事について「事実」を指摘しておきたい。

N-ro25 p.3左上のD-ro 山賀宛のI. U. (伊東三郎)の手紙は1968年8月15日付だが、この手紙の最後は次のようになっている。「クラーク記念館では清々しい印象を受けありがたいことでした。その印象を詩に書きました。お礼の心持を含め御笑覧に供します」とあり、この手紙と一緒にあの詩が送られたことを示している。

この点はN-ro23, N-ro25の頭書の部分と矛盾するが、問題の「クラーク会館でD-ro山賀に手渡した」というのは、S-ro切替がD-ro山賀から生前聞いたことによる。68年の第55回大会当時、私が大会事務局を担当したので、D-ro山賀の受けとった手紙でも大会関係のものは私へ廻されて来ていた。

上記の手紙も星田へ廻されて来ていたが、詩はD-roの手もとに残った。D-roは手もとの詩を見る度に、あの時クラーク会館に彼を迎えに行った記憶がよみがえって、そのとき受けとった……と感じ、S-ro切替にもそう語ったのだろう。こうしてひとつの「伝説」が生まれたのかもしれない。

### ☆札幌E会 ザメンホフ祭のご案内

今年も道央圏によびかけて盛大に!

ザメンホフを語る、HEL図書販売、日本大会ビデオ上映、UK参加報告、楽しく歌おうなどのプログラムがいっぱい。

例会には出られない方、待っています。

と き: 12月10日(土) 16時~20時

と ころ: クリスチャン・センター5階

会費: 夕食付1000円(同伴・学生 500円)

# SALATO

★札幌E会は10月1日、日本大会慰労を兼ねて全体会。会の行事を担当する「月番」が交替した。新「月番」は金森美子、豊歳正吾、義村政見の3人で、さしあたっての仕事はザメンホフ祭。

★日本大会を取材したNHK・TVニュース(全道ネット)が8月22日朝、4分間放映された。あの人この人、多数登場で、編集も概ね好評だった。

★そのニュースに登場した札幌の豊歳正吾(76歳)にさっそく「北大時報」(北海道大学の学内誌)がインタビュー。「生涯学習に励む本学元事務長」と題して同誌8月号に写真入りで紹介された。

### 札幌E会青年部主催の研修会へ

と き: 10月16日(日) 9時~17時

と ころ: 札幌市中央区大通東2丁目

札幌郵政会館(北電東側)

参加費: 1500円 (歌集 900円は別途)

どなたでも参加できます(大歓迎!)

### 札幌の初級講座 10月15日開講!

10月15日から毎週土曜日(14時~17時)

北区北7西6 クリスチャン・センター

全10回、受講料5000円、予習不要の講座

連絡先 渡辺晋道<sup>しんどう</sup> Tel. 0126-22-3091

### ☆Heroldo de HEL n-ro 26

(1988 setembro-oktobro-novembro)

北海道E連盟機関誌 年6回 年会費2000円

(振替口座 小樽 17075) 購読者も同額

88-89年連盟会費(または購読料)受付中!